

本当の勇氣

恐怖が襲い掛かってきた時

人は慌てて逃げ出そうとする

恐怖に捕まらないように

その人は必死で走るのだ

しかし

そうやって身体に力みがあることで

かえって恐怖に支配されてしまう

恐怖と闘うことを通じて

恐怖が一層強くなるのだ

だから

恐怖とは最初から闘わないことだ

なぜなら

恐怖とはしよせん

心が生み出す「影」に過ぎないからだ

「影」にはそもそも実体がないので

つかみ掛かって闘うことが不可能だ

逆に

「影」を相手に奮闘することで

その人はどんどん消耗してしまう

だから

もしも恐怖が襲ってきたら

一切の抵抗をやめてみるといい

きつと

身体は震えるだろう

あるいは

胸を引き裂かれるような

痛みを感じるかもしれない

だが

恐怖にできることなど

しよせんはそれだけのことに過ぎない

恐怖は私たちの身体を震わせて

胸をいくらか引つかくことができるだけなのだ

このことを直視する勇気が持てたなら

恐怖はしよせん「影」に過ぎないと理解できる

もうあなたは恐怖に構わなくなる

たとえ恐怖が訪れても

それに巻き込まれずにいられるだろう

「本当に勇敢な人」というのは

「恐怖しない人」のことではない

そうではなくて

恐怖がたとえ内側に在っても

それに飲まれない人のことだ

逆に

恐怖をそもそも感じない人は

勇気について何も知らない

そういう人は

たとえ向こうから列車が突っ込んできても

何も感じないまま立っているだろう

もしもあなたに恐怖が在るならば

それはあなたがそれだけ注意深いという証だ

だから

あなたはそのような注意深さを

天から与えられたことに感謝すべきだ

なぜなら

あなたの内に在るその注意深さが

あなたを目覚めさせるからだ

あなたは恐怖と面と向かう

あなたは「恐怖が在る」と知りながら

その闇の中へと あえて入っていくだろう

その勇気が

あなたのことを覚醒させる

あなたの意識を純粹にし

あなたの背骨をしなやかにする

そのようにして

あなたは目覚め

本当の意味で「勇敢な人」となる

十字架

「祈る」というのは

「生きる」ことだ

だから

「祈り方」を知っている人は

「生きる責任の背負い方」もまた知っている

逆に

何らかの「神」を信仰し

決められた作法に従って祈っていても

「生き方」を知らない人はたくさんいる

「自分の足」によって立ち

「自分の道」を歩くこと

それが

その人にとっての「祈り」となる

逆に

「自分の人生の責任」を

他人に背負わせようとするなら

その人は「祈り」を表現できないだろう

そうして人は 時として

神に「責任」を背負わせて

救い主に「原罪」を背負わせる

だが

「自分に与えられた十字架」は

自分自身にしか背負えない

どんな救世主であつても

その人の代わりに

「十字架」を背負う権利はないのだ

しかし

それはとても良いことだ

なぜなら そうやって

自分自身で「十字架」を背負って歩くことで

その人の心は「浄化」されるからだ

確かに　もしも他人に代わりに

「十字架」を背負ってもらうなら

その人は「人生を生きる苦悩」から

一時的には目を逸らせるだろう

だが 同時に

その人は「生きる喜び」についても
ずっと無知なままになってしまう

「生きる喜び」を知っている人は

「生きる苦しさ」も知っているものだ

そういう人は

「十字架」を他人に背負わせようとせず

自分自身でそれを生きる

そして

「十字架」はいつも

「今ここ」に在る

もしもそれを当人が受け入れるなら

本当の意味での「天国への扉」が

ゆっくりと開き始めるだろう

そうして

眉間に刻まれたしわは緩み

胸に穏やかな風が吹く

深く呼吸してその人は笑う

「生きる」ということの意味を知り

その人は思わず「自分の過去の苦悩」を笑うのだ

そのようにして

「生きる」ということの味を

その人は知る

生きる勇氣

「良薬は口に苦し」と言うけれど

実際には 今の身体に合っているものは

口にすると「旨い」と感じるものだ

また

たとえば「苦しみ」と直面しようとも

それを乗り越え、受け入れるなら

そこには「清々しい解放感」がある

それに対して 世の中には

不味いものを「健康のため」と我慢して食べ

それでいて 「内側の苦しみ」からは逃げる人がある

だが

本当はそれを逆転させるべきだ

「食べる物」は旨いほうがよく

「生の苦味」はあえて味わって溶かすに限る

そうすれば

食べることによって身体は「健やか」になり

苦しむことを通して心は「浄化」される

反対に

人が不味いものを我慢して食べるのは

「健康であろう」と執着するからだ

健康な身体にしがみつ

き
それをなんとかして保持しようとするから

不味くてもそれを我慢できるのだ

だが

そうやって我慢することによって

その人の感覚は鈍っていく

何が本当に身体に合うのか

その人はわからなくなっていく

そして

苦しみを前にして逃げ出す人は

自分の中の「混沌」が怖いのだ

自分自身と向き合う勇気が持てないから

苦しみを味わうことができなくなる

結局のところ

勇気を持つことが必要だ

「不味くても健康のためにこれを食え」と

たとえ他人が言おうとも

自分の身体感覚を信じて

「旨い」と感じるものを食う

そして

たとえば誰もそれを強制しなくても

自分から「内側の深淵」と面と向かい

そこにある苦しみを味わい尽くす

そうして初めて

その人の命は花開く

「自分自身」を生きる勇気が

その人の中で花と咲くのだ